

第9回 「泉大津市オリアム隨筆賞」

【優秀賞】

虹色の座布団

中村実千代・栃木県小山市

苦学してやつと教員になつた私に、母は一枚の座布団を作つてくれた。

「職員室と教室の両方で使うように……」

買物帰りに立ち寄つた実家の座敷で、母がそう言いながら出してくれた一枚の座布団は、毛糸で編んだ縞模様のカバーに包まれていた。

「椅子に直接座ると冷えるからね、からだを冷やしてはいけないよ」

カバーの模様は幅一センチくらいの横縞で、様々な色の毛糸で編んである。「ほんとうは新しい毛糸で編んでやりたかったんだけれど、残り毛糸が少しづつあつたから組み合わせてみたよ」

手に取つて見ると、母の言う通り、古い毛糸を工夫して組み合わせ、まるで、くすんだ虹のような模様になつていて。

「虹みたいだね」

「虹？ 虹はもっと華やかな色だよ」

「そんなことないよ、綺麗だわ。お母さん、お祝いに作つてくれたんでしょう？」

「お前が頑張つて先生になつたから、何かお祝いをしてやりたくつてね」

母はそう言うとふつと目を伏せた。

町の中心地で時計店を開いていた両親は、だんだんと傾いていく商売を立て直す術もなく、貧しさに喘ぐようになった。私が高校へ進学する頃は、二つ違いの兄と私の学費が重なることになり、いちばん苦しいときだった。

勉強好きな私は大学へ進学したかった。だが、苦しい家計を考えたら、それは到底叶わぬ夢。高校を出たら就職、と決まっているようなものだから、行きたかった進学校は諦めて、就職に有利な学校を受験することにした。

受験前に、母と一緒にその高校を見学に行つた。木洩れ日にゆらゆら照らされた母の後ろ姿が淋し気なので、おもわず「お母さん」と声を掛けたら、

「実っちゃん、Aさんに大学へ行かせてもらつたらどうかね」

と声を立て、真剣な眼で見つめてきた。母は義兄の名を呼んで、その人の手を借りて進学することを勧めているのだ。私は無言で母を追い抜き校門を出た。

高校を出て働いていた職場で夫と知り合い結婚し、義父の勧めで通信教育制の大学で学んだ。二年目に教員採用試験を受け合格して、念願の教員になることができた。

母は目を潤ませて喜び、「えらい、えらい」を連発した。婚家の世話で教員になれた娘を不憫に思い、親としての不甲斐なさを詫びているようなくちやくちやな泣き顔だった。

初めて赴任した学校で、持つてきた荷物の中から一番最初に取り出したのは、母の作つてくれた「虹色の座布団」。

職員室の椅子に載せて掌で撫でていると、隣の同僚がそれに気づいた。

「へえ、手作りのお座布団？」

「母が教員になれた祝いに編んでくれました」

私が得意そうに言うと、彼女は目を丸くしてもう一度座布団を眺め、小さく手を叩いた。

「おめでとう！ お母さんの愛情いっぱいね」

「おめでたいので、模様は虹なんですよ」

「そうか、虹色の夢を持ち続けて努力したから、お母さんがご褒美をくださったのね」

冬の寒い夕暮れ、子供たちが帰った教室で一人仕事をしていると、椅子に座ったお尻に母の座布団の温かみが皮膚を通して伝わってくる。先輩たちの厳しい指導に疲れ果てて職員室へ戻ると、もう一枚の座布団がやさしくからだを温め慰めてくれた。

母は、職員室に一枚、教室に一枚と、娘が座る場面を想像しながら、一目一目に愛を込めて座布団カバーを編んでくれたのだ。

ある日、仕事中にからだの具合が悪くなつた。

やつと子供たちを帰した教室で、辛くて涙がこぼれた。私は虹色の座布団を机に敷いてその上に頭を載せ、母を想つて座布団を抱き締めた。

幼い頃に母に抱かれ類ずりされたこと、娘時代に喧嘩をしたこと、結婚式のとき母の顔が淋し気だったこと、色んな思い出が、走馬灯のように弱った心をよぎつていく。

母にすれば、念願叶つて教職に就いた娘に、もっと高価な祝い品を贈りたかつたことだろう。だが、母には自由になる金銭はもう無かつた。だから、古いセーターを解した毛糸を集め、せめて、娘のからだけは守つてやろうと、せつせと編み棒を動かした。

あれからもう四十数年が経つ。

「虹色の座布団」が有つたからこそ頑張れた教職の日々も無事終了し、この頃は亡き母のことばかり思い出す。

座敷にポツンと座つて下を向き編み棒を動かす母の横顔は、どこか儂げで、縋りつきたいくらい懐かしい。